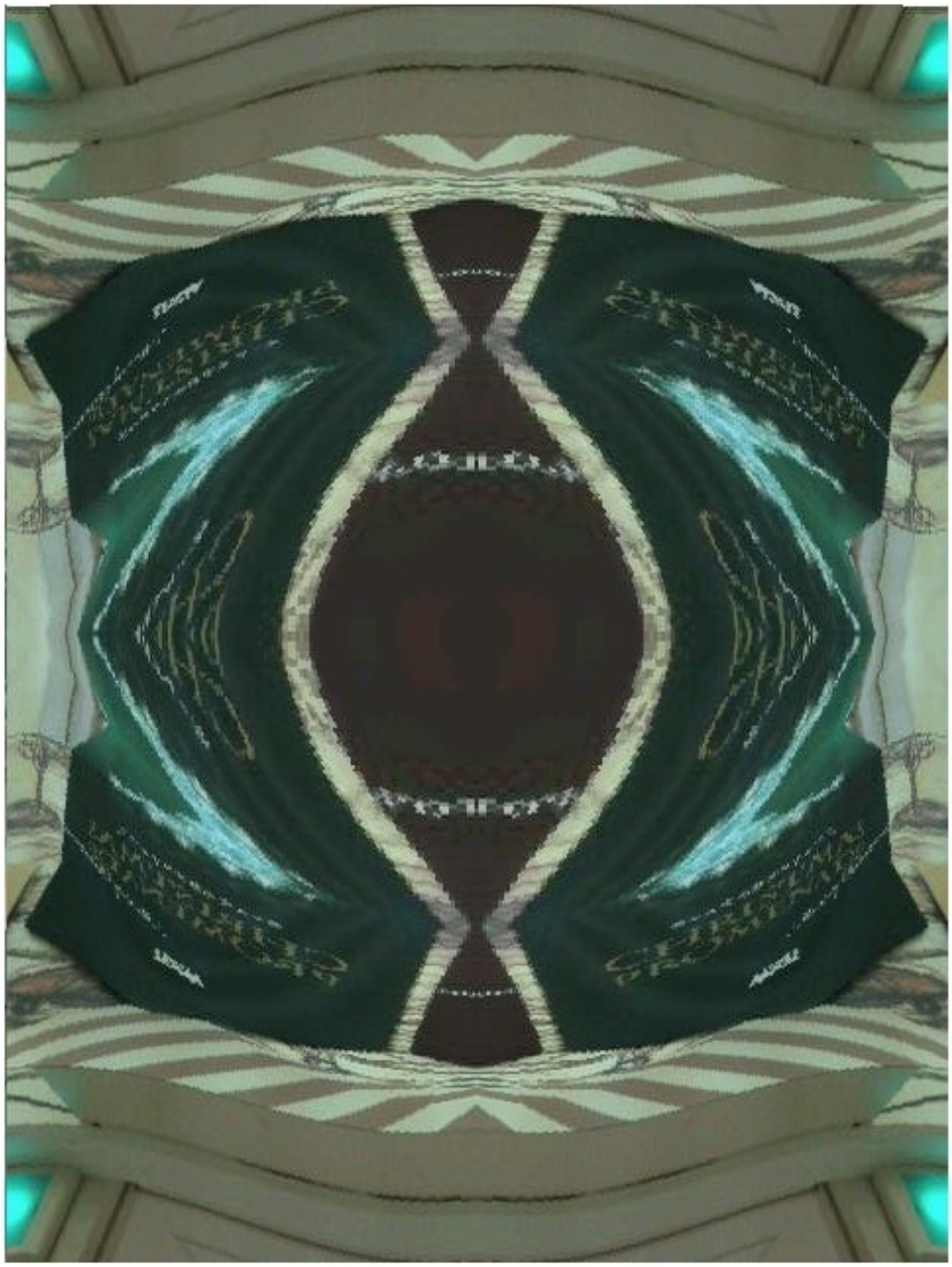
元祖とろろ屋



mikatuki98

【元祖とろろ屋】で一人の男がズルズルと豪快に音を立てながら、『とろろうどん・細めん仕立て』を食べていた。店は忙しくなるお昼時には３０分ばかり時間があるせいか、カウンターに座って食べているその男の他には、店の一番奥まった隅っこの四人掛けのテーブル席に、女がもう一人居るだけだった。
　その女はガリガリとした身体つきとギスギスした顔つきの、若いのか年が行っているのか瞬時には判断し難い様相をしている。そして男と同じものを食べているのだが、同じものとは思えないほど静かだ。かと思えば、いきなりズルッと大きな音を立てると、丼から顔を上げ正面の何処か一点を見つめながら、牛のようにモグモグ・モグモグとゆっくり噛んでいる。男は女が時折ズルッと音を立てる度に、何となく女をチラリと見てしまう。そのパターンが数回繰り返されたところで、男は『とろろうどん・細めん仕立て』を完食して店を出た。

「ブーブー」
　店を出ると同時に声がしたので、何だ？　と思って男が辺りを見回すと、ブタではなく、ブタのお面をつけた小さな男の子がブタの声を真似ていた。
「ちっ、子供か……」
　男は正体が子供だと分かると子供の存在を無視して、乗って来たバイクに跨りエンジンを掛けようとした。と、さっきの子供が男の側に駆け寄って来ると、男に向かい再び大きな声で言った。
「ブーブー」
　しかし子供が苦手な男は無表情でアッチへ行け！　と言わんばかりの手つきで子供を追い払う仕草をした。ところが男の動作で子供はスイッチを切られた電動式の玩具のように、ピクリとも動かなくなった。
「ん？」
　子供の変化に気が付いた男は、ブタのお面を被ったままの子供の顔をジッと見詰めていると、子供は再びスイッチが入ったかのように動き出した。そして男のまわりを小走りに一周すると、もう一度ブーブーと言って店の中へ入って行った。
「ふん。苦手だな、子供は……」
　男はボソリと吐き捨てるように言うと、今度こをバイクにエンジンを掛け車体をクルリとＵターンさせると、県道に出てスピードを上げた。

『あの店のとろろうどんはマジ旨かったなぁ～　細めんなのがイイや』
　男はバイクで風を切りながらとろろうどんの味を思い出していた。
『今度、あいつを連れて来るか……　店の名前は確か【元祖とろろ屋】だったな。県道３４号線沿い！と』
　男は更にスピードを上げ、軽快に山添の県道を走っていた。と、何気なく遠くに出ている看板が目に入った。
【元祖とろろ屋】

「エッ！？」
　男は今し方『とろろうどん・細めん仕立て』を食べた店と同じ名前の看板を見て不審に思い、店が近付くのに合わせバイクのスピードを落とすと、ゆっくり走りながら店の看板を確かめた。
『……やっぱり【元祖とろろ屋】だったな。チェーン店でもあるのか？　いや、未だ少ししか走ってないのに、そうそう同じ店もあるまい』
　男は暫くバイクを走らせながら考えていたが、何かに取り付かれたように【元祖とろろ屋】のことが気になって仕方がなくなったので、引き返して確かめることにした。

「がらんごろん♪」
　店の引き戸を開けると、先にとろろうどんを食べた店では聞かなかった音が鳴った。一瞬、男の背筋に悪寒が走ったが、嫌な予感がしながらも店の暖簾をくぐると男は思い切って中に入ってみた。すると、先の店の外で出会った子供にそっくりな男の子が、今度はブタのお面を頭の上に乗せて、なんと！　店の真ん中に立って居るではないか。一気に男の全身が鳥肌になった。
「なんだコイツ……」
　少し上ずった声で男が呟くと、待ってました！　とばかりに子供は胸を張り両手を腰に当てて言った。
「エヘン！」
　小さな身体の割に馬鹿でかい声が誰も客の居ない店に響くと、それが合図だったかのように、ワンワンと吠えながら狼のような精悍な身体つきの犬が五・六匹、店の奥から現れた。犬たちは群れの中央を空けるようにサークルを作ると、その空間に霞のような紫煙と共に女が一人姿を現した。男がよく見ると、先の店の隅っこで男と同じ『とろろうどん・細めん仕立て』を食べていた女だ。
「ほっほっほっ。わらわの作ったとろろうどんが、そんなに旨かったかえ？」
　男の背筋に沿って冷水を糸状に流されているような感触の、全く持って薄気味悪い女の声。若いのか年が行っているのか分からない、いや、それよりも生きているのか死んでいるのか何とも判断のつかない不気味な女の姿。
　男はあまりの気持ち悪さに、今直ぐにでも店を出たいと思った。出たいと思って身体を動かそうとするが、足がビクとも動かない。恐怖心も加わって唯そこに立って居るのか精一杯だった。それでも男は渾身の勇気を振り絞って叫んだ。
「お、お、おまえ！　……」
　何者だ！　と言おうとするが上手く舌が回らない。男の顔面が徐々に蒼白になって行く。そんな男の表情を暫く嬉しそうに見ていた女が口を開いた。
「待っていたの……　あなた」
　見ると女の顔は憂いを帯び、先ほどまでの形相から一変して、艶かしくてとろろのように白い肌の、見るからに美しい若い女性の姿になっている。そして優しいけれど儚げな声で男に語り掛けて来た。
「貴方さまがあの日、坊とわたくしをお迎えに来て下さると仰せになったから、この地で【とろろ屋】を営みながら、ずっとずっと貴方さまをお待ちしておりました。嗚呼……　やっとやっと迎えに来て下さったのですね」
　今にも男に抱きつきそうな様相で語り掛ける女に、男は益々身体が硬直して心臓までもが凍りつきそうになっている。
「お、お、俺は……　お、お前なんか知らないぞ！」
　やっとのことで言葉にした男は意を決し、もう一度渾身の力を込め、自分の上半身をグッと捻って入り口の方に向き直ると、両手で空をかいて泳ぐようにしてやっと店を飛び出した。
「なんだありゃ。なんだありゃ。なんだありゃ」

　唇を震わせながら何度も同じ言葉を繰り返す男の手元も震えている。
「一体あれはなんなんだ、なんなんだ、なんなん……ウォーーー！」
　悲鳴を上げながらバイクのエンジンを全開させ、爆音を立てると男は猛スピードでその場から走り去って行った。

　男はそれからはもう、何も考えられないままに走って走って走り続けた。そしてどれくらい走ったのだろう。男は止まったバイクに跨ったまま不意に意識が戻ったのか、辺りを見回すとちゃんと自宅の前まで戻って来ていた。意識がバイクと一緒にぶっ飛んだかのように、男は無我夢中で走り続け、途中事故も無く家まで辿り着いたのが不思議なくらいだ。
　男はバイクを降りると極度の脱力感に見舞われ、自分の身体なのに別の生き物を引きずっているかのように、やっとの思いで自分の部屋に雪崩れ込ませると、屍のように床に転がった。と同時に懐に入れていた男の携帯電話が鳴った。屍と化した男の身体は動かない。何度も鳴る携帯電話の音。その後、五分おきに繰り返し鳴っていた携帯電話の音が六度目に鳴った時、男はようやく懐を探って出た。
「あー」
「慶介？　あたし、理子！　ねぇ、どうしてたの？　ずっと携帯鳴らしてたのに全然でないんだもん」
「あー」
「ねぇねぇ、慶介。わたしたち今度こそお店開けそうなの」
「あぁ？」
「ほら〜　慶介も美味しいって言って気に入ってたお店。あそこのオーナーが、一軒わたしたちに任せてくれるって言ってるのよ」
「あぁ？　店？」
「うん。元祖とろろ屋！」
　彼女の言葉が男の耳の奥まで響くや否や、男は咄嗟に左手に握っていた携帯電話を部屋の壁に向って思いっきり投げつけた。かと思ったら突然床から起き上がり、狼のようにウォーーー！
　と雄たけびを上げると、なんと！　そんまま発狂してしまった。
　その後、男が正気に戻ったかどうかは定かでない。　了